



高柳総一郎

ロング・ドライブ

かげふみ同好会

A LONG DRIVE BY SOICHIRO TAKAYANAGI

in Kagefumi Doko-Kai's "Shin Saya Hisakita"

ロング・ドライブ

高柳総一郎

A Long Drive
by
Soichiro TAKAYANAGI 2017

cover design and art direction
by
Matthew A. KEITH
(t. m. production)

ロング・ドライヴ

ゆみちゃんは拳銃を持っている。

どんな名前の銃か、なんて知らないけれど、とにかく持っている。おんぼろの十年落ち、古臭いカローラに二人。まわりは墨を垂らしたように真っ黒。何も見えやしない。

「どこまで行くの」

ゆみちゃんは何も言わない。借り物なのに、車の吸い殻入れにはタバコが満載。もう一つ増えて、山から吸い殻が転がり落ちる。

「馬鹿なこと考えてるって思う？」

ゆみちゃんには左目元にほくろがある。わたしはそれだけ見て、うつむいた。彼女がどんな顔をして暗闇に向かっているのか、わたしにはわからない。

アクセルを踏む。見えない力がわたしを押しさえつける。ユウヤがわたしの脳裏にフラッシュバックする。

「県を超えるために、高速乗って、銃持って」

「馬鹿だよ、そんなの……」

ゆみちちゃんに相談したのは偶然だった。彼女とは大学の同回生だったけど、ほとんど話したことはなかった。食堂で友達とメソメソ泣いて、慰めてくれた友達を振り切って家に帰る途中。まるで冷え切ったマグマみたいなものが喉奥からせり上がってきて、わたしが一歩も動けなくなったときに、初めてゆみちちゃんと話した。

「悔しいんでしよう」

上から声が降ってきた。わたしは泣いていて、ゆみちちゃんは笑っていたと思う。

「動けなくなるくらい、悔しいんだ」

凶星だった。何も言い訳できなかった。悔しい。何もかも戻してしまいたいほど、悔しい。こんなことは初めてだった。

「……とりあえず落ち着こうよ」

ゆみちちゃんとわたしはとりあえず家にもどることにした。ブランケットを体に巻きつけて、

砂糖を山ほどコーヒーに入れて、流し込んだ。わたしの中に。すべて。

「落ち着いた？」

ゆみちゃんは、小さく笑った。わたしはそれには答えなかったけど、どこか救われたような気がした。ゆみちゃんはそこにいるだけで、わたしに具体的に何かしてくれたわけじゃなかったけれど、友達をよくわからない慰めよりよほどマシに感じたのだった。

「ユウヤのこと、許せないの？」

「許せない、と思う」

曖昧な答えだった。わたしは確かにユウヤにひどいことをされた。誰がどう見たってそうだし、わたしの中で渦巻いているものは、妄想や勘違いなどでは決してない。わたしはコップの底にこびりついたコーヒーを、蛇口の水で押し流す。感情もこんな風に単純にできていればいいのに。

現実はずう。

「それで、そうやってくるまったままで、悔しい許せないってずっとブツブツつぶやいて過ごすの？」

「ほっといてよ。それで満足するんだから」

「大学辞めて隣の県に逃げたから？　いくらでも手段はあるじゃん」

ゆみちゃんが言いたいことくらいわかっている。追いかけていけばいい。どこまでも。そしてその先でぶちまけてしまえばいいのだ。

「ねえ、わたしこんなの持つてるんだけれど」

ごと。机の脇に黒い塊。テレビの中でしか見たことなかったけど、わたしにだってそれが何かくらいわかる。拳銃。

「悔しいんでしょう。だったらやり返してやればいいの」

何をしろというのか、わたしに何をさせるのか。螺旋のように思考が絡まり、結論が出てゆく。そんな馬鹿な話があるもんか。でも、これ以外にわたしが受けたことの復讐を果たせるのか？

わからない。何もわからなかった。ゆみちゃんがそう言ったから、ゆみちゃんが用意してくれたから。気づいたら雑誌の付録についていた安っぽいかばんに拳銃と財布、携帯を放り込んで、友人の加奈子から借りた白のカローラに乗り込んでいた。

宇宙空間を飛んでいるような感覚だった。ただ暗闇をまっすぐに飛び、まわりには覚束ない星々がまたたいている。宇宙飛行士をニュースで見たことがあるけれど、ちょうどわたしと同じような気分なのだろうか。まっすぐに進む。広大な、それでいて何も無い世界を。ニュー

スで見た宇宙飛行士は、ずっと笑っていた。宇宙はとても素晴らしいところです。地球はとても綺麗なところです。

実際にはどうだろう。

空気もなく、友もない。大学だってないし、ユウヤも加奈子もない。

わたしをとりまくのは死の空間だ。だって周りには空気がないんだから。この鉄の棺桶に乗っているのは、わたしとゆみちゃんだけだ。そして死の種を植え付ける拳銃だけ。

「ラジオでもつける？」

「いいよ」

チューンボタンを押す。くるくると液晶パネルに表示されたデジタル数値が変わる。ずっと。ずっと。死んでしまっている。隣の車線で、最新型のスポーツカーが音を残して去っていく。

「後悔してるの？」

「どうして？」

「高速乗るところまでは顔色が良かったから。今真っ青だし」

ミラーを見る。わたしの顔が映っている。ひどい顔で真っ青。気にしてなかったのに、実際に見てしまうと、嫌が応にも自分の状況がわかってしまう。吐き気が込み上げる。

「サービスエリアがある」

緑色の看板が、彼方へ吹き飛んでいく。暗闇へ。鉄の棺桶はゆっくりと左折しサービスエリアへと入っていく。

夜中だというのに、サービスエリアは煌々と明るかった。私はトイレへ走った。足がもつれそうになって、転ばないようにするのに苦労した。個室へはいってすぐ、ゲーゲー吐いた。水面に波紋が浮かぶばかりで、何も出なかった。

何をしているのだだろう。

水面に歪んだわたしの顔が映る。ゆみちゃんなら、復讐を遂げるんでしょう、と事も無げに言うだろう。復讐。復讐。

ユウヤとセックスに及んだこと自体は、大した問題じゃないように思えた。たしかに同意は無かったけど、わたしはそれでもいいか、くらいに考えていた。彼のことは好きだったし、できれば付き合いたかったから。でも次の日には彼は大学から姿を消していた。すべてが無駄になり、あの夜のことは悪夢へと変わった。

いくつも空虚な言葉を交わしたように思う。その一つにも中身が詰まっていたら、わたしはゆみちゃんの言葉には耳など貸さなかっただろう。わたしは空虚な言葉を担保に愛を貸して、結局裏切られたのだ。それが許せなかった。初めてのひとはそんなものだよ、なんて加

奈子は見当違いも甚だしいことを言っていたけど。

そうじゃない。

わたしにとつて、ユウヤはもつと大切な存在だった。頼る人もいない。死んでしまった通信だけがある沈黙の棺桶の中でも、共に歩んでいけるような人だった。少なくともわたしにとつては。

だからユウヤの行為は許せなかった。親の都合で、とかそういう話はメッセージで伝え聞いた。そんな理由にならない。わたしを裏切っていい理由にはならない。

水面から波紋が消える。わたしの顔が映る。

併設の売店は開いていた。

アルコールにサンドイッチ。おにぎり。見たことのないくらい巨大なゴキブリが横切つてくらがりへと消えていく。イトインコーナーで寝ているドライバーたち。わたしは全て無視して、ふとあるコーナーで立ち止まった。氾濫するお土産の中、ひっそり佇むCDコーナー。その一角、四角く小さい箱のようなものが、そばにずらりとならんでいる。カセットテープ。そういえば加奈子のカローラは、CDが再生できないのだった。よくスマートフォンから直接音楽を流していた。これが車の中だともって聞こえづらい。おかげで、いまだに加奈

子が好きなアーティストの曲を頭から聞けた試しが無かった。

「……全然知らない」

聞いたことのない演歌歌手に、孔雀みたいな格好の女性歌手。クラシックに、かつて流行を彩った海外アーティストたち。なんとも興味が惹かれないラインナップのはずなのに、わたしはなんとかそこにあの鉄の棺桶で流す音楽を探そうとしていた。聞いたことはないけれど、もう何でも良かった。わたしは適当にひとつ手に取る。名前に聞き覚えはあるような気がした。確かこの歌手は、ついこの間亡くなったばかりだ。適当な理由でも、天国にいるなら許してくれるだろう。

わたしはタバコのパックとカセットテープ、それにココアを買って、カローラに戻った。

「長かったね」

ゆみちゃんが言った。タバコの吸い殻はキレイになくなっていった。当たり前だ、あれだけの量だったのだから。これ以上は吸えなくなってしまう。カローラの中はタバコの匂いで充満していた。不思議と嫌いではなかった。ユウヤも同じようなものを吸っていたし、なににより彼はともかくタバコに罪はない。すぐそこにユウヤがいそうな気がして、わたしは怒りを表すべきか、そうでないのか迷った。

「何買ったの」

「タバコとココア。あとカセットテープ」

「カセットテープ？ 使い方わかるの？」

「ここに挿し込めばいいんでしょう。それくらい分かる」

ゆみちゃんは興味なさげだった。

古い歌がカーステレオから流れる。彼の歌だけがカローラを満たしている。宇宙船に満たされた酸素のように。

四十キロ。六十キロ。八十キロ。再びわたしとゆみちゃんは広大な宇宙へ漕ぎ出す。孤独な宇宙に。

「使ったことある？」

拳銃のことを言っているのだろうと思った。もちろんあるわけがない。あつたらおかしし、わたしは刑務所行きだ。これが最初なのだ。最後にもなるだろう。そんなものをそう何度也使ったことがあっていいはずもない。

「そう」

「ゆみちゃんはあるの？」

「ある」

火を灰皿に押し付けながら、ゆみちゃんは事も無げに言った。

「どんな感じなの？」

「すごい音がする」

彼女は口で再現し、手で拳銃の形を作り、自分のこめかみをふっ飛ばした。

「なんで引き金を引いたのか、わからなくなる」

「どうして？」

「簡単だよ。自分が弾ごとふっ飛ばされるような気がするから」

死の空間がわたしを取り巻いている。星々が静かにまたたき、わたしたちの頭上を横切る。

牛が満載されたトラックが追い越す。テープが途切れ、車内にまで死が蔓延する。

「いや、違うな。自分が弾になったような気分になるんだよ。ポーチドエッグ好き？」

一瞬何を言われたのか分からなくなりそうだったが、わたしはなんとかそれに答える。

「箸でもフォークでもいいけど、半熟だと黄身に穴開けたら中身が出てくるでしょ。あんな

感じ。自分がふっ飛ばされて、じわっと中身が出てくる。わけがわかんなくなる」

「ゆみちゃんはそれで良かったの？」

彼女は答えない。吸い殻だけが灰皿に増えていく。彼女は誰を撃つたのだろう。ふつとば

されて出ていった『自分』はどこに行ったのだろうか？ いずれにしろ、彼女はここにいる。

彼女がそうでもわたしは分からない。刑務所に行くかもしれない。代償はあまりにも大きい。

「とにかく、相手は死ぬ。ユウヤも死ぬよ」
死ぬ。

たった二文字の言葉で、わたしの頭はぐらついた。よく考えれば、死の蔓延した鉄の棺桶の中で、いままでよく耐えたと言えるだろう。わたしはカロラーの運転を諦め、ハザードランプをつけて、高速道路の端へと車を止めた。

それでも吐き気が止まらなくて、額をハンドルに押しつける。ハザードランプの光が車内を警告で満たす。

「どうしたの」

ゆみちゃんは言った。吸い殻の山が崩れ、助手席側に転がって灰が舞う。

「どうしたの」

「ユウヤを撃ちたいわけじゃない。殺したいわけじゃない。それくらい憎んでいるけど」

ワゴン車がものすごいスピードで暗闇へと消えていく。トラックが、スポーツカーが、軽自動車が一。

わたしは取り残されてしまっている。もはや誰の耳にもわたしの言葉は届かないのだ。壊れたラジオからはなんの音も出ない。死んでしまっている。何もかもが死んでしまっ

いる。

わたしはリアシートに放り込んでいたカバンを取り出す。黒い塊。拳銃。死の種を植えるためのモノ。

「でも悔しかったんでしょ？」

「悔しいよ。でもだからって、殺す意味まであるの？」

生きているのはわたしだけだ。この鉄の棺桶の中で、わたしだけが生きている。滑稽だった。そんなわたしが、死が蔓延する暗闇を超えて、さらに人を殺しに行くのだ。これが喜劇でなくてなんだというのだ。

ゆみちゃんはわたしのことを笑っている。加奈子だって、ユウヤだってわたしのことを馬鹿にするだろう。怒りに任せて、出来もしない殺人をやるうとして、こんなところまで来たのだから。

わたしはとにかく再びエンジンをかけ、アクセルを踏み込んだ。ゆみちゃんは何も言わなかった。ただタバコの吸い殻だけが増えていく。

誰も喋らない。静かだった。死んでしまったラジオも、飽きてしまったカセットテープも、なにもかも音を出さなかった。それがなぜだか、わたしを逆に安心させていた。

次のサービスイリアまで、あと三十キロ。

「朝だよ」

ゆみちゃんが不意に言った。わたしたちはサービスエリアの中で、不快な朝を迎えた。汗ばんだ背中と、バキバキに凝り固まった体が、わたしを現実に取り戻した。サービスエリアに辿り着いてから、何もできなくなりそのまま寝てしまったのだ。

「これで良かったのかな」

ゆみちゃんは微笑むばかりで、それには答えなかった。やり返してやればいい。それ自体は彼女の言葉だ。拳銃も彼女が用意した。だが引き金を引くのはわたしだ。その行動自体は拒否することもできる。すべてはわたしの意思によるものだ。だから、わたしは拒否した。それだけだ。

「良かったんだよ、これで」

不快な朝日が、不快な過去を押し流すように昇っていった。ユウヤのことも、いずれは過去になる。怒りに任せてこんなところに来たのも、全て過去になる。ただ、わたしが暗闇で感じた孤独はどこかにまとわりつくことに違いはないはずだ。死んでしまった通信網の中で、わたしは感情を抱えて宇宙をゆくのだ。

わたしはタバコを啜えて、もはや暗闇でなくなった朝へと出た。もうもうと薄い霧がわた

しを遅い、汗が冷えて背が震えた。

朝日が昇る。全てが過去になる。今日までの全てが。

わたしは拳銃型のライターでタバコに火を点ける。誰もいない助手席にそれを放り出すと、吸い殻の山がゆっくりと音もなく崩れた。

不意に、スマートフォンが震えた。LINEの通知名は加奈子。

『あんたさあ、どこいんの？ 車、ちゃんと返してくれるんでしょね』

「返すよ。今日の夜には」

『ユウヤを追いかけて行ったんでしよう』

凶星だった。わたしは苦笑しながら、残っていたココアを流し込んだ。糖分がわたしの脳裏を駆け巡り、頭がぐらついた。

「気が済んだから、もう帰る」

『事故だけは起こさないでよ。あと、言うの忘れてたけど、車の中でタバコは止めてよ。ユウヤの真似ならやめときなって、さんざん言ったじゃん。あたしの車だって、臭くなるんだし』
もはや言い返すだけの材料もなかった。彼女には何もかもお見通しで、わたしの行動はそれだけ幼稚だったのだ。わたしは適当に加奈子をあしらひ、彼女にお礼を言った。わたしは孤独だったが、もう孤独は怖くない。

『じゃあね、由美』

「さよなら、加奈子」

わたしは車内に戻る。吸い殻はもう無い。タバコは同じ銘柄。ココアを追加し、カセットテープを押し込む。

死んでしまった世界の中でも、わたしは孤独ではない。わたしは朝日の中、アクセルを踏んでカローラを発進させた。

